

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

SUMMON NIGHT (サモンナイト) OVR (オーバー)

【作者名】

Wisadm

【あらすじ】

異世界リンバウム、豊かな自然とマナを使い、召喚術による繁栄を謳歌する世界。

異なる世界より召喚した召喚獣を生活の要所要所に使い、その召喚獣から得た知識で生活を豊かにしている世界。

その世界の人たちにとって召喚獣はなくてはならないものであり、身を守るすべであり、力の象徴であり、友であり、家族である。もちろん、それで全てではない。

召喚獣を道具のように見ている人間、実験動物としか見ていない者、召喚獣を憎んでいる者など、負の感情を持ったものもいるそんな世界。

しかしながら、この物語はそんな異世界の摩訶不思議ではなく、地球の科学技術にドップリ浸かった現代の少年の話である。

1・ある日の俺の話…日常編

「ハッーハッハ！弱い！弱すぎるぞー！無色のクソ共！その程度じゃ俺には勝てねえよ！」

余りにも拍子抜けな無色の派閥のクソ共に笑いが抑えられない。無色の派閥って言うのは、かなり古くからある召喚師の派閥の1つだ。

しかし帝国ではテロを起こしたり、要人の家族に召喚呪詛を施したりするほとんど犯罪組織のような派閥で、暗殺者なんかとも繋がりが多い召喚師の風上にも置けないクソ共のことだ。

「…い……きん……」

なんだ？五月蠅いな…せっかく俺が気分良くしているってのに。無色のやつ等か？

「何言ってるんだ!?起きんか！ドアホウー！」
「ムギヤ!?!」

周りで笑いが巻き起こり、目の前にはある意味無色の派閥よりよっぽど厄介なうちの学校の教師がいる。

はあ、またいつもの夢かよ…

「言霧 風(ことぎり なぎ)、君はまたか、また私の授業中に寝てたのか!?!」

「1j 1jめんなわご…。」

すると、血管が浮き立ち始め

「その言葉は、何度目だぁー!!」

切れた。

この教師、本当に怒ると怖いのである。

普段ニコニコしているくせに、怒ると口調が変わるレベルで怒る。結局その日の彼の授業は俺へのお説教で終わってしまい、そのことに気付いた彼は泣きそうな顔で職員室に戻っていった。

俺はお説教のせいで頭と耳が痛くなり、ノックダウン中だ。

悪いと思っているために、しっかり聞いているから余計にヒドイ…

「おい、風またかよ？最近多いよな」

そんな俺に話しかけてくる物好きもいるようで、俺の予想道理ならコイツは俺の親友とでも言うべきヤツである。

名前は上島（じょうしま）。爽やかなサッカー部のキャプテンだ。

髪は短めに切っていて、俺から見てもカッコいいと思う。

良くこんなのが俺の友達やってるよ、ホント。

「そうなんだよ、聞いてくれよ上島ぁ…」

「おつおつ、何だよ言ってみな？聞くだけ聞いてやっから」

聞いてくれるだけでも本当に良いやつだなぁと思う。

愚痴を聞いてくれるヤツって言うのは、何処にでもいるにはいるけど少ないものだ。

「最近さぁ、夢の内容がどんどん具体的になってきてんだよ。それに、段々と軽い目覚ましじゃ起きられなくなってきたよ。大変なのよ…」

「それってずっと同じ夢なんだよな？不思議だよなあ。俺も似たような夢とかなら偶にあるけど、まったく同じ夢って中々どこるかまず見ないよな」

「そうなんだよ。つまりこれってさあ、俺のせいじゃなくてこの夢が悪いよなあ？」

「いや、授業中に寝ちまったお前が悪いよ？確実に」

「な！裏切ったな、上島あ……」

「何でだよ。つか、もうすぐ受験なんだから授業中に寝てるなよな」

「そう、何だよなあ……」

楽しかった高校生活ももうほとんど終わり、今は一面冬景色。

教室では、煌々とストروبが点いている。

そんな光景が物悲しさを助長する。

「まあ取り合えずは、帰りますか」

「そうな、帰る帰る」

その後も2人で馬鹿な事を話しながら帰り、分かれ道で「また明日な」といつて分かれた。

そこからしばらく歩いてもうすぐ家に帰り着くというところで、明日提出の課題を学校に忘れていることに気が付いた。

幸いそこまで学校から遠いわけでもなく、10分も歩けば学校に着く。

「…はあ。しゃあない戻るか」

溜息が白くなって消えたのを見て、「これ以上寒くなる前にさっさと課題を取って帰ろうと思った。

これ以上単位を落としたら卒業がヤバイ。

しかし、急いごととして空回りしてしまい振り返った瞬間人とぶつ

かかってしまった。

「いってっ!？」

「ッ!!」

急いで立ち上がり、詫びる。

歳は20歳を過ぎたくらいだろうか？

少し茶色がかった髪的青年、服装は白いフサフサフードのクリーム色?のコートだ。

「ごめんなさい、急に振り返ったりして。大丈夫ですか？」

「あ、ああ、俺も急いでたんだ。ごめんな、じゃ」

そう言うと、彼はさっさと立ち上がり走って行ってしまった。

かなりのスピードが出ていたから相当急いでいたのだろうか？

彼が見えなくなってから少しして、ふと自分も学校へ課題を取りに行かなければいけないのを思い出した。

歩き出そうとして、彼がいたところに光を放つ石を見つけた。

綺麗な紫色の石だ。

「落とし物か？だとすると今の人のか…」

ちらりと彼が走っていった方を見て、絶対間に合わないだろうと推測し、交番にでも届けておくことにして学校へ急いだ。

2・ある日の俺の話…非日常編

「はあ、やっとついた…10分って1人で歩くと何か長く感じるな」

いい加減空が暗くなってきて学校がなんだか不気味に見える。
誰もいない学校に少し寂しさを覚えた。

「さて、さつさと課題を取って来ないとな」

中に入ると、やはりというか外より暗くすぐ近くですら良く見えな
い。

「こんなに暗くなるもんなのだろうか。」

「…ん？」

真後ろでカッーンと金属を落としたような音が聞こえ振り向く。
ズルズルと何かを引きずるような音も聞こえる。

その二つの音が此方に近寄ってきているのだろうか、音が段々大き
くすぐそこですいている気がしてくる。

何か分からないものが近づいて来る恐怖に額に冷や汗が流れる。

最初は普通に掃除の人かと思ったが、それはないだろう。

なぜなら、柱に隠れて様子を伺う俺が見たのはズルズルと死体を
引っ張る鉈を持った小人だったからだ。

死体は、切り取られた頭部が腹に乗っていたが、怒ると怖いあの先
生だった。

「…」

出かかった悲鳴を無理やり両手で押さえつけ、やりしのご。
引きずられていく間先生の顔がずっとこちらを見ている気がして
気が気じゃなかった。

何だアレは？何だアレは…何だアレは、何だアレは何だアレは何だ
アレはナンダアレハナンダアレハナンダアレ…

「うああああああ…!!?!」

「……!?!」

小人の目がギョロリとこつちを向く。

余りの恐怖に叫んでしまった。

「し、しまっ…!?!」

「……!!」

足から力が抜けペタンと座り込んでしまう俺。

その瞬間、頭上で何かがコンクリートに突き刺さった音がした。

その音の正体を確認する間もなく俺は走り出していった。

涙が溢れ出し、鼻を垂れ流し、恥も外聞もなく逃げ出した。

心臓が破裂しそうで、息が苦しくて、何でこんなことにと、全力で

神や運命やありとあらゆるものを呪った。

それでもしないと心が壊れそうだった。

「何だっって言っただよ!!クソッ!!クソオッ!!!」

少しだけあの小人との距離が開いてきて、少しずつ遠くも良く見え
るようになってきた。

このまま行けば逃げ切れるかと、淡い希望も湧いて来たが、そこま
でだった。

他の廊下から、あの小人が二匹俺を取り囲むように現れたからだ。
追い詰められたっ…!?!

このままだと、俺も…首無し死体。

その言葉が、さっきの光景が、頭から離れてくれない。
嫌だ、助けて、誰か、

「お願いだから、誰か、助けてくれよ…！」

その命（オーダー）、聞き届けました。

「え…」

キイイイイイイイイ…

拾った石が、紫色に光り輝く。

我が名を、我が名を呼んでください！我が名は…

「メルクリウス」

一層光量を増す紫の光は、その全てを放ったかのように消え、消え
去った後には俺に跪いた1人の少女がいた。

「対魔王型ゲイルTYPE481」（トリプルシグマ）、固有名

称メルクリウス。我が剣の全てを主に捧げます」

機械の様な鎧に身を包んだ紫の髪を持つ綺麗な少女だった…

3・異世界トリップ…気絶中

俺は呆然としていた。

この状況下で、何かに見惚れるなんて余裕は無い筈なのにその少女に見惚れてしまっていた。

「主、お怪我はないようですね。それでは敵を殲滅してまいりますので、しばしお待ちを」

そう言うと、少女　メルクリウスは俺に向かって最敬礼をし、マントから一枚刃を抜き、子人を切り裂いた。

「すげえ……」

まるで剣舞でも舞っているかのように小人を切り刻むメルクリウス。

その舞いが鮮血によって凄く綺麗に映えている。

けどグロい…

さっきからちょっと小人の血が飛んでくる。

そして廊下には、飛び散った小人の血と返り血に塗れた俺とメルクリウスだけが残った。

子人はいつの間にか全て切り刻まれていたようだ。

「ああ主、本日はご機嫌麗しゅう御座います…ム」

メルクリウスは呆然としたままの俺に、臣下の礼を取ろうとして途中で止め。

「すいません主。この世界のマナは私には少なすぎてこれ以上顕現できそうにありません。これを渡しておきますので、役立ててくださいませ。では…」

そう言って消えてしまった。

後に残ったのは、メルクリウスがいた事の証明である小人の血と、彼女が残したであろう一本の刀だった。

「何だったんだよ、今の…ッ!!そうだ、先生え!!」

まだ何かあるかも知れないため、刀を持ってさっきの場所に戻る。そこには、やはりというか、物言わぬ死体となった先生がいた…

「この人が、何をしたらって言うんだ…!」

無残な死体となってしまうた彼を見ると、自然と涙が出た。

少し口うるさい先生ではあったが、気のいいまじめな先生だった。

最近寝てばかりの俺にも、しっかりと見棄てずに説教までしてくれて…

「いっただい何で…なんで!!」

言っただって答えなんて返ってこないのは分かった。

分かってたけど、言わないと気がすまなかった…

すると、突然足元が暗くなった。

「なっ?!」

そして俺は、地面に飲み込まれた。

「お爺様」

「ああ、もうすぐだ…向こうで生贄も手に入れた」

何処かの暗い部屋、わたくしとお爺様は異界の門についての研究を行っている。

生贄というのは、向こうの世界の死んで間もない人の死体のことだ。

別に殺して手に入れているのではなく、向こうの人に確認を取って使わせてもらっているらしい。

らしいというのは、わたくしがまだ召喚術を使えず、向こうでお爺様の召喚獣が何をしているのかを知ることができないから。

「レーン、今から生贄の儀式を始める。儀式用の短剣を持ってきてくれるかい？」

「はい、お爺様」

今までずっとこの研究をしてきた。

恒久的にある世界への門を開ける研究。

私とお爺様の悲願。

「ええと、儀式用の短剣でしたわね…」

確か、これでしたわよね？

早く戻らなくては。

「お爺様、これでよかったかしら？」

「おお、それじゃ。ありがとうの…ムウ、これは」

そう言つと、お爺様は少し顔を険しくされて、お爺様の召喚獣が倒されたことを嘆かれました。

それにしてもお爺様の召喚獣を屠るだなんて一体どんな人物なのでしょう。

「仕方あるまい、生贄だけでもこちらに引き込まねば…」

お爺様は召喚術を少し弄つたものを使い、召喚獣が運んでいた死体を呼び込むようです。

今回の儀式は成功するといいいのですけど…

「…ハッ!!」

お爺様の魔力が周囲を包み始め、地面を暗く染める…

「あ！何か出てきましたわ。といっても、死体なんですよけど…」

「そういうな、ワシだって死体など好き好んで見たくないわい」

そして、暗い地面から出てきた二つの影…

「え？二つ？」

「む？予想外じゃな…血だらけなのを見ると、知り合いが死体を見つけて駆け寄ったか？」

出てきた影のうち一つは首の乗った死体、そしてもう一つが武器を持ち気を失っている黒髪の少年でした。

「その少年はまだ生きているようじゃな…レーン」

「はい、部屋に」

「何を言っておる？召喚獣用の檻に決まっておるっ」

え？檻？聞き間違えかと思ひ聞き返す。

「檻…ですか…？」

「そうじゃ、その者がワシらと同じ温厚な者が分からぬではないか」

「そう、ですね…」

お爺様のおっしやる事は確かに正しいのですが、納得は…できそうにありません。

渋々頷き、彼を檻へと運ぶ。

「武器は取り上げておかないと、いけないわよね…」

武器を取り上げ、召喚石を探す。

途中で、名も無き世界の人間が召喚石を持たないというのを思い出したが、召喚石が出てきたのでいぶかしんだ。

ついに、名も無き世界でも召喚術が開発されたのだろうか？

わたくしはそこに興味を持ち、それを自分のポケットへ忍ばせました。

お爺様にも告げずに…

「レーン儀式を始めるぞ…」

「はい…今行きますわ」

彼のいた世界はどんなところなのかしら。

出来ることなら、お話を聞いてみたいものだわ…

その日も、儀式は成功しなかったが、わたくしの心は沈まなかった。

明日が楽しみですわ…

4・異世界トリップ…檻の中

う、うう…

もう朝か？

布団は何処だ…寒いぞ。

ベットこんなに硬かったっけか？

それにジャリジャリするし、体が痛てえ…

じゃあない起きるか、今から寝るのは無理だし。

「…あれ、俺まだ寝てるのか？」

周囲の状況を見て、そう結論付ける。

だってさあ、朝目が覚めたら学生服で牢屋（檻）の中って夢じゃなかったら何なのさ…

「あら、目が覚めたんですね。おはようございます」

やはり夢で間違いないだろう。

牢屋の中にいる俺に金髪碧眼の美少女が笑顔でお辞儀をして喋りかけてくるのだ。

たとえ夢でも、今朝の俺ナイス！

「え、ええ。おはようございます」

出来るだけおかしな所の無いように笑顔で返す。

すると彼女は華の様な笑顔を浮かべる。

「まあ…」の様子ならこの檻からすぐに出してあげられそうですわ！
さっそくお爺様に掛け合ってこなくては」

そう言つと、彼女は外へと駆けて行つた。

「それにしても、リアルな夢だなあ」

頬つぺたを抓つてみる…痛い。

夢じゃ、無いのか？

いや、最近じゃ夢の中でも痛みや匂いがしっかりあるって言われてたな。

ならどうするか…

「夢じゃない」ことの証明 無理だな」

考え出して、数秒で諦めた。

「どういふときに打って付けの言葉がある。

無理なら無理で、現実とか夢とか関係なく一生懸命生きればいいな。

これ、俺の先生の談ね。

…ん？先生…？

「何だ…これ？」

子人…鉦…返り血で血みどろの…廊下か？

血、血血血…首の無い、死体？首だけの先生…？

「…これ、夢だよな？」

ま、全く…夢の中で夢を見るなんて、俺もそろそろヤバイか？

だって、そんなわけ無いんだ。

「こんなのは夢で…」

でも、俺は気付いてしまっているのだ。

自分自身の格好に、血まみれの学生服に…アレが、実際に起こってしまっていることだ。

「あああ、あああうあああああ…！」

「グスッ…ヒック……」

ひとしきり泣いて、泣き疲れて、一周回って冷静になれた。

まずは、情報収集から。

そうさ。俺はまだ、本当に助かったか分からないのだから。

もし、さっきの記憶が本当なら俺は先生の死体と一緒にあの小人達の仲間に連れて来られるかしたはずだ。

方法が地面に飲み込ませるって言うやや特殊な方法だったが…

「良く見ると……何かの生き物の檻なのか。それに、中世ぐらいの技術力で作られたものがほとんどだ」

これぐらいなら鍵が開けられそうだな。

「ふっ、」の俺のピッキング技術を舐めるなよお」

胸ポケットからピッキング用に持ち歩いているヘアピンを取り出す。

それを鍵穴に差し込みさっさと鍵を開けてしまっ。

…別に悪いことをしていたとかじゃないからな。

鍵を持ってなかった俺が自分の家の鍵を開けるのに必要だっただけだ。

「ふう、狭いところにいると肩が凝るぜ」

さて、檻から出たのはいいけど…どうしようか？

あ、そうだ。メルクリウスに聞けばいいじゃないか。

何か知ってそうな気がするし。

「ええと、石は確かこっちのポケットに 無い」

ど、何処行つたあー!?メルクリウス!?

良く考えたら刀も無いじゃないか…

という事は、武器になりそうなものを取り上げられた？

でもあの石が危険なものだと思われるのか？

見ただけでは綺麗な石としか思えないし。

いや、もしかしたらアレが何か知ってたのかも…

そ、そうだ。さっきの美少女！あの娘に聞けば何か分かるかも！

って、ちよつと待て。

今までの理論から行くとさっきの娘はあの小人の仲間ってことにならぬか…

もしそうならあんまり正面から聞いて、「あなたは知りすぎたのよ」ザクリッってことにならないともかぎらないよな…

しかもその理論で行くなら俺、捕らえられてることになってるから脱獄したってことになるのか？

「詰んでるな」「レ」

逃げるか？とも考えたけど無理だよなあ…

どうもここ地下っぽいし、見つからずに行くのは物理的に無理だ。

やっぱり、さっきの娘に聞くのが一番か。

「つまりは檻に戻れと、そっしつしつとか」

武器もないし、それが一番安全か？

下手して檻の外にいるのがばれたら、殺されそうだな。

ここで待ってて殺される可能性と出て行って殺される可能性を考えた所戻ろうという事に。

再びピッキング用のヘアピンを用いて、今度は鍵を閉める。
意外と上手くいった。

「さて待つか」

「何を待つんですの？」

「おわっ?!い、何時からいたんだ!?!…ですか？」

し、しまったあ…!!

つい敬語を忘れてタメ口で言っちゃまった!!

大丈夫だよな?いきなりグサリツは無だよな!?

「鍵をガチャガチャしているときからですわ」

クスクスと笑いながら答える。

よ、よかった…ぎりぎりセーフか？

「あはは、ちょ、ちょっとこの鍵の形が気になりました」

苦しい!それは苦しいぞ俺!!

「まあそうですの?この鍵は珍しいかしら？」

まさか、信じた…?!

「そ、そうですね。俺がいたところのものに良く似ていたので、」

すると、少女は途端に嬉々とした表情になった。
な、なんだ!?今の何処にそんなに食い付く所が!?

「そ、それは、本当ですよ!」

「え、ええ。本当ですが…」

「も、もっと詳しく!あなたのいた世界のことを聞かせてください!」
「は、はあ。いいですけど」

ん?イマナンティッタ?

あなたの世界のこと?

「それって、どついでのことだ」

自分の口から出たとは思えないほど乾いた声だった。

5・異世界トリップ…現状把握

「そういえば、説明していませんでしたわね」

そう言って、彼女の口から出たのは衝撃の事実。

嘘や妄言と言った方がまだ分かりそうな現実。

「つまり、俺は異世界に来てしまっただけじゃなく、しかも帰れないと？」

「ええ、召喚石を使わない完全にこちらに引き込む術式でしたから」

「じゃあ、俺の扱いですか？」

「そう、ですわね…召喚石がなくて、主人もいない、つまりははぐれ召喚獣ですわ」

いきなり拉致られて、はぐれ扱いですか？

拳を握りしめない。

「あの、俺の持ってた紫色の石知りませんか？」

「わたくしが預かっていますので安心してくださいませ」

「いえ、今すぐ必要ですんで返してほしいんですが…」

「ダメですわ」

軽やかな笑顔で即答された。

駄目だ、望みが絶たれた…

「それと、お爺様にこの檻から出してもらえるように頼んだのですが…」
「こちら駄目でした」

少し申し訳なさそうにする彼女を見て思う。

本当にこの娘はあの小人達の仲間なのだろうか？

「それでは、また後でできますわ」

彼女はそう言って去っていった。

聞いた話からいくらか推察を交えて現状を把握してみる。

まず、この異世界の名前はリインバウム。

3つの国があつて、それぞれ聖王国、旧王国、帝国であり、今いるここは聖王国から南に行った所にある森の中。

聖王国に仕えていた古くからの召還術師の名家の屋敷の地下……

逃げ出しても、北に逃げれば捕まるし、南に逃げれば海しかなく、この近くの森は危険指定を受けているはぐれの住む森だそうだ。

次に、あの紫の石のことだ。

あの石の名前は召喚石と言うので、リインバウムでは常識らしく、召喚術師が召喚獣を呼び出すときに必要なものとして重宝しているらしい。

色によって呼び出せる世界が決まっているらしく、黒が機械兵士等がいる機界ロレイラル。

赤が鬼や妖怪、龍人の住む鬼妖界シルターン。

紫が天使や悪魔等の霊的なものが住む霊界サプレス。

緑が幻獣や妖精、獣人の住む幻獣界メイトルパ。

無色透明なものが俺がいた世界を含む、名も無き世界と呼ばれる無数の世界。

取り合えず、メルクリウスの召喚石を返してもらえないことにはここから逃げることにすら出来ない。

そして最後に、この世界が俺が最近見る夢と完全に同じ世界である可能性が出てきた。

まだ確たる証拠なんかはないけれど召喚術や召喚術師の派閥の話を聞く辺りでそう思った。

「ま、しばらくは、」で様子見たな…」

あ…トイレとかどうしよう。

『オーン・カルナシアス殿、そちらの研究はどうか？』

レーンを外に出して自室で水晶に向かい研究の報告をする。

あの子にはこんな話は聞かせられない。

「成果は芳しくありませんが、こちらで一体名も無き世界の人型召喚獣を手に入れました」

『ほう…それは本当か!? 一度解剖してみたいものだ!』

何でも解剖すればいいと思っているのかこのアホは!

一体しか居らぬと言っておるだろうが!

「しかし一体しか居りませぬゆえ、こちらとしても軽々と手放すのは…」

『ム、そうか…では、一千万バーム出そう。それでどうだ?』

このガキは…本当に分かって言っておるのか?

いくらもうすぐ派閥の総帥になるからといって何でも思い通りになるわけではないんじゃないぞ!

しかし、そうは思っても口には出せないのも事実で、研究資金の底が見えてきた自分には渡りに船でもあった。

「仕方ありませんなあ…それでは、次回の研究費用に少し色を付ける事を追加なら了承もやむなしですよ」

『うむ。任せよ！それぐらいは容易だ！引渡しは何時になる？』

「そうですね、5日後でどうでしょう？」

『あいわかった』

「それでは……」

『これからも無色の派閥のために頼むぞ？』

「ハッ」

フッ！せいぜいあのガキには役に立ってもらおうとしよう。

コレで待たしばらくあの子に楽をさせてやれる。

レーンは、笑っていられる……

「ククク…確り頼みますよ？」

部屋の片隅から声が聞こえる。

そうだった。あのかたのためにもがんばらなければ……

そう、アノカタノタメニ……

うう、さむ……

毛布ぐらいくれよな。凍死しちまうっての。

「もう少しかな……」

時間を確認しようとして時計を見る。

23時47分……

もういいか。

へアピンを取り出し檻を出す。

さて、その辺を散歩がてら脱出経路の下調べと行きますか！

まずは武器庫を探さないとな…

あと、トイレも。

6・脱走計画…思案中

異世界生活2日目 …

武器庫を発見、メルクリウスからもらった刀も見つかったためこの日は探索を終了。

探索したときの様子からどうやらこの屋敷は、中世の砦の様な造りだと思われる。

一階の窓からは高い堀が見えた。

レーン…あの娘の名前。この日に直接聞いた所、普通に答えてくれた。

レーンに俺の世界のことを話し盛り上がった。

異世界生活3日目 …

ついにトイレを発見！

武器庫から刀を取り出し、くすねたロープを使って高い塀を下り、外の森へ…

取り合えず刀を抜いてみようとしたが抜けなかったため渋々帰る。

この日もレーンと話す。

最早、彼女との会話は俺のオアシスである。

その日はふと気になって、メルクリウスの召喚石はどうしているのか聞いてみた。

「適正が合わないから呼び出すことは出来ないのだけれど、いつもポケットに入れているわ」だそうだ。

まあ、彼女が乱暴に扱うことだけはしないと約束してくれたのでそれでいい。

異世界生活4日目 …

段々この生活に慣れてきてしまった。
順応性が高いと言っべきか、自分事ながら呆れればいいのか…

「さーて、今日はレーンに何を話そうかなあ」

そんなことを呟いていた時の事だ。

ドアがいきなり強めに開き、まるでコスプレでもしたかの様な格好をした爺さんが一人入りそうなポロポロの布切れを持って入ってきた。

そして、おもむろに檻の鍵を開け布切れを放り込んで出て行った。

「何だったんだ、今の…」

今の人がレーンの言う「お爺様」かな。

ここには2人暮らしらしいし。

態々布切れ入れに來ただけってことはないと思うから、何かあるんだろっけど…

「なんか、嫌な予感がする…」

取り合えず近づいて様子を見ることにする。

すると、布切れが起伏しているのを確認した。

どっつやら、この布切れは生き物であるらしい。

「くそっ、ただでさえ狭いのに余計に狭くなっちまった」

その日は、レーンは來なかつた。

異世界生活5日目 ……

いつものように硬い地面から起き上がる。

最近体が痛くなくなってきた。

「そういえば、あの布切れは？」

気になって横を見る。

未だに布切れの状態で転がっていた。

いい加減に起きろよ。

「お〜い、起きやがねー」

やるせなさが勝ってしまい、声が抑揚の無いものになった。

まあ確かに中身は気になるが、それ以上にめんどくささと嫌な予感とが相まってやるせなかつた…

「ん〜？もう朝〜？」

「朝といえば朝だが？」

「そっか〜、おはよ〜」

と言いつつも一切動こうとしない布切れ。

もう無視していいよな？

「ってちょっと待って、あんた誰？」

布切れよ、そんなボロボロな状態で、しかも中から出られない状態で凄まれても恐怖の欠片も湧かないぞ？

「取り合えず、その布切れの中から出てきたらどうだ」

「…それもそうね」

そついつと、モゾモゾし始める布切れ…

もぞもぞで

もぞもぞもぞもぞ…

もぞもぞもぞもぞもぞ…

もぞもぞもぞもぞもぞもぞもぞ…

「…」

沈黙する俺達…

「なあ？」

「…何よ」

「もしかして、出らんないのか？」

「…」

そして、再びの沈黙…

「ねえ？」

「…何だ」

「出らんないから出して？」

「はあ…」

渋々ながらも出してやることにした俺は甘いのだろうか。
布切れを見ると信じられないものが付いていた。
そら出られないはずだ…

こんなの中世には発想すら無かったであろうものだ。

この世界の人知っている方が不思議だと思う。

布切れはジッパーで閉めてあった。

「ぶっはーいやあ、狭かったから助かつちやった」

出てきたのは、銀色の犬？のような耳と髪をした同い年くらいの女

性だった。

格好は何と言うか、昔ながらのRPGゲームに出てきそうな盗賊ルック。

よく見ると尻尾も生えているようだ。

ヤバイな、厄介者のおいしかしない…

「それで？あんたは何者で、何でこんな所に連れて来られたんだ？」

すると、彼女は少し恥ずかしそうにしながら、

「ん、いやあ、実はね？ここの塀に誰かがロープ掛けっ放しにしてたから盗みに入ったら捕まっちゃって。テヘッ」

なんてほざきやがった。

と言うか、テヘッって何だ、テヘッって…

「アホだろオマエ」

「な!?じゃあないじゃんか！あたしはぐれなんだよ!?盗みでもやらないとこっちはじゃ生きていけないんだから!!そういつあんたはどうなのキー」

「俺か？俺はナギって言う、いきなりこっちに引きずり込まれて何もしてないのに武器を取り上げられた挙句、ずっとここに放り込まれる不幸な人だよ」

「名前がナギって事以外、一切分からないよ」

「そうか？」

「まあいいや、あたしはオルフル族の響界種（アロザイド）で、名前はロウオン。よろしくー！」

オルフル族やあるざいど？は良く判らないけど、それによろしくと返し、檻の反対に戻る。

「あれ、なんでそっち行っちゃうの？近くにいるほうが暖かいよ？」

「いや、別に暖かく無くてもいいし」

「あたしが寒いのー！」

「むしろどうでもいいぞ」

「なんだとー！」

飛び掛ってくるロウオンを見てみると尻尾を振って構ってほしがっている犬を思い出した。

「今日もレーン来なかったな……」

もう幾分か暗くなり、騒いで疲れたのかロウオンも寝てしまっていた。

昨日も来なかったし、何かあったのか？

それとも……

「きゃあああああああああ!!?!」

なっ!!レーンの声だ！

何があったんだ。

「見に行くか……」

唯事じゃない感じの悲鳴だったし。

でも、抜け出しているの見たらやばいな。

「いや、待てよ……メルクリウスの召喚石、確かレーンのポケットの中じゃなかったか」

助けないと駄目じゃんか…

まあなんだかんだ言っても、レーンには色々世話になったしな。そうと決まれば、イッチョやりますか。

「おい、ロウオン？いい脱走計画があるんだが、乗らないか？」

眠ってしまったはずのロウオンの耳がピクリと動いた。

7・脱走計画…実行開始

「以上が作戦の内容だ理解したか？」

急いで説明したから結構難しくなっちゃったかもしれないけど、大丈夫だろうか。

「まあ、取り合えず武器庫の場所も覚えたとし合流したら後は簡単でしょ」

「ああ、頼むな」

さっさと檻の鍵を開けて走る。

「おお、ほんとに鍵開けられたんだ！やっぱりあたしの仲間欲しいな」

「いやいや、盗賊はやんないって！じゃ、また後でな」
「オッケー！」

お互いの無事を願って分かれる。

どっちがミスしても多分破綻する脱出作戦。

「さて、俺は急いでレーンを救出しないと」

声が出したのは、確かこの先の儀式場だったよな。
彼女の無事を祈って暗い廊下をひた走る。

あたしは今檻から出て、武器庫への道の途中…

「なんだけど。何でこんなに魔獣がいるのよお！こっちに警備はいないって言ったじゃんか！バカァー!!」

武器庫前で魔獣に囲まれております。トホホ…
いくら倒しても湧いてくるんだよ…

さっきナギと別れてから結構経っちゃってるし、間に合うかなあ。

と、そんなことを魔獣の突進やら毒の息やらを避けながらに思っ。

「うっ、武器が欲しい…ん？そっいえばそこが武器庫じゃん」

走って取りに行けるかな？

通路に魔獣がぎっしりで、上手く抜けられそうにはない。

「あ、そ・う・だ　いい事考えた」

そんなことを考えている間にも魔獣は突っ込んでくる。

まあ、それを待ってただけどねえ。

魔獣を避けて引っ掴み、間髪入れずに集団の中に投げ入れる。

「…!?」

何体もの魔獣がぶつかってそれぞれが悲鳴を上げ体制を崩し、真ん中に道が開く。

「今のうちよー」

あたしは武器庫に転がり込んだ。

中は比較的埃っぽく、武器を放り込んで碌に整備もしていないんじゃないかと思う。

「ケホッ！ホコリっぽ〜い！」

ええと、S級A級の武器をありったけ持って行けばいいんだっけ。うっは〜、宝の山じゃない！ナギも分かってる〜

売れば遊んで暮らせんじゃないかな。

そんなことを思いつつ、あたしが入っていた袋の中に詰めていく。

「……ッ!!」

あ、魔獣たちのこと忘れてた…

魔獣たちの攻撃を避けようとしたが、たくさん持った武器のせいで避けられずもろにタツクルを喰らってしまい窓から落ちた。

「レーン！大丈夫か!？」

儀式の間に駆け込み、レーンを呼ぶ。

幸いレーンはすぐに見つかった。

祭壇の上に寝かされていてまるで生贄か何かの様で少し血の気が引いた。

「レーン!!」

走って近寄り生きていることを確認してホッとす。

気絶している様なのでメルクリウスの召喚石を抜き取りレーンを起こす。

一体誰がこんなことをしたのだろうか？

一瞬、レーンの爺様かと考えたが、レーンの話を聞く限りそんな人物だとは思えなかった。

「う、ううん…、ナギさん…?」

「ああ、無事っばいな」

「何が…?! いけません！早くここから逃げなくては…!」

逃げる? どういうことだ?

「残念ダッタね?」

「誰だ!?!」

声のした方に振り返るが、暗くて影の様なシルエットしか見ることが出来ない。

するとその影はゆっくりとこちらへと進み出て来て、姿がはっきりと分かるようになってきた。

その姿は昨日、ロウオンを檻へ放り込んでいった爺さんだった。

「あんた、昨日の爺さんか?」

「アは…覚えてたんだ? デモ、ちょっと違うんだヨね」

何だ? 声が二重に聞こえてきてる?

それに、昨日見たときと雰囲気がるで違う。

昨日見たときは厳しそうな爺さんだと思ったけど、こんな気持ちの悪さは感じ無かった。

「あれは、お爺様ではありませんわ! あんなものが、お爺様を語ることは許せません…!!」

「アは…そんな事言わナイデよう? けタけタけタ…!」
「…の…!」

明らかにおかしい、そうまるで人が変わったかのような…
悪魔にでも取り憑かれたみたいな。

ん？ 悪魔に取り憑かれた？
そうか！悪魔ならいるじゃないか！

「霊界サプレス…」

「バレタ？正解でエす。じゃ、死んで」

そう言つと爺さんは手のひらをこっちに向けてきた。

次の瞬間、まるでトラックにでも轢かれたかのような衝撃が走り俺は吹き飛んだ。

「グアッ!？」

「ナギさんー!？」

いっつてえ…クツソ、目の前がチカチカする…

何か、何か無いのか。

この状況を覆せる何か…

「あ、メルクリウス…」

「オヤ？まだ生きているミタイだね。とドめヲサシてアゲル」

はは、まだ運には見放されてなかったのか？

頼むぞと、ポケットの石を握り締める。

「 来い！メルクリウス！ 」

そしてその場を紫の光が包み込み、中から

「また、厄介ごとでしゅか、でちゅ…すみません主、るれちゅが上手くまわりましえん」

メルクリウスに似た少女が出た。

「…え？」

やっぱり俺は、運に見放されているみたいだ…

8・脱走計画…破綻

「プ、くくくハはハ！その子は何ダい？ドウやら同郷ノ者みタイダ
「ド」

「しちゅれいなやちゅ…」

な、なんだ？いきなり止まって…

「痛い」

…噛んだのか。

「アはハ…！お腹痛イよ…」

「うう…」

馬鹿にされ唸りつつ睨む幼女。

しかし、ふと何かに気付いたようにこちらを振り返る。

「ま、どうかいたしましたか？」

やっぱりと言っが、この喋り方。

「もしかして、メルクリウス？」

「はい。いかにもメルクリウスでありましゅ…」

メルクリウス、お前に何があったんだよ。

身体的に幼くなるとか、すぐに思いつくので「真実はいつも1つ」が
口癖の探偵が飲んだ薬ぐらいのもんだぞ…

「何があっただよ…」

「しちゆれいを承知で申し上げましゅと、主の召喚みしゅかと」

「え、俺の？というか、召喚ミスって？」

「召喚に失敗したので、本来の力が上手くちゅかえずこんなしゅがたに」

ま、マジか…

逃げられるのかここから。

「ですが、あの程度の悪魔なら今のままでもやれましゅ。発音は苦手でしゅけど、戦闘は得意ですから」

無い胸を張って言うメルクリウス。

「じゃあ、ここから逃げ出すまでの時間稼ぎもして欲しいんだけど、いけるか？」

「はい、受けたみゃわりました」

本当に大丈夫か少し不安だが、そんなことを言えるほど余裕が無い俺にはどうしてやることも出来ない。

無力で、どうしようも無く無力で、何で俺がと本気で思う。

「レーン、逃げよう」

「え、はい。ですが…」

「今は、ここから離れよう。それからどうするか考える」

本当は俺だって、ここで戦ってやりたい。

俺なんかのために戦ってくれてるメルクリウスや気を使ってくれたレーンのためにも。

でも、力が無いんだ。

俺には、何も 出来ない。
その言葉が、突き刺さる。

「分かり、ました…」

躊躇いと悔しさが入り混じったような顔…
俺も、こんな顔してるのかな。

「行くよ」

「逃がさナイッて言ッてルだロ！」

「それは「ちらもでしゅー」」

ヤツが打ち出した透明な球？をメルクリウスが切り裂く。
凄、本当に戦えてる。

「とりあえず、中庭に出るぞ。上手く行っていれば、門も開いて逃げる準備も、いざとなれば戦える準備も出来てるはずだ」

後ろも見ずに全力で長い階段を駆け上がり中庭まで逃げる。

ロウオンが頼んだことを終えてくれているなら、すぐにここから逃げられる。

しかし、ロウオンが見当たらない。

まさか、ミスった？

それとも

「いや、でもそんな…」

頭の中に引つかかっていた可能性、今一番信じたくないそれは

逃げたのか？

その言葉。

「おい、嘘だろ…?」

そして、嫌なことは続くものである。

例えばそう、メルクリウスが傷だらけで階段を走ってくるのがここから見えた。

「メルクリウス!」

ボロボロで、擦り傷だらけ。

それでも戦うことを止めない。

しかもその理由は、俺のため。

まだ何とか戦えているがこのままじゃ、負けて殺される。

すると、自分の心が磨耗して磨り減っていくような錯覚を覚えた。

あいつを見捨てて逃げれば、お前は助かるぞ?

そんな声が、聞こえた気がした。

「見捨ててる…?」

そうだ、見捨ててしまえばいい。

最初から良く判らないヤツだったじゃないか。

それによく考えるよ? あいつが勝手にお前のことを主だ何だって言ってるだけの関係じゃないか。

利用して逃げればいいんだ…

「逃げ…れる。逃げられる」

「ここであいつのために動いたって、また裏切られるかもしれないぞ？」

ロウオンみたいだ…

「そうか。そうだよな…」

逃げれば俺は助かる…

「なあ、レーン？何か武器になりそうなもの、あるか？」

「え。そ、そうですね…」

青い顔でメルクリウスを見ているレーンに問いかけると、一瞬嬉しそうな顔をしたがすぐに悲しそうな顔になり、謝るように言った。

「ごめんなさい、無色のサモナイト石がありません。武器があればわたくしだって少しくらいは…」

「ゴメン、サモナイト石って？」

「召喚獣と契約する前の召喚石のことですわ。でも、わたくしには素質が無くて契約の儀式が出来ませんから」

説明から召喚石とサモナイト石の違いは石の中に召喚獣の真の名が刻まれているかないからしい。

そう言われて、メルクリウスのサモナイト石を見る。

確かに文字の様なものが浮かんでいた。

でも、もしそうなら…この仮説が正しいなら…

「いや、そのサモナイト石貸して…」

そう、もしそうなら…

「俺が契約できるかも」

9・脱走計画…終局

「ねえ、ネスウ…まだ着かないの？」

今朝から歩き通しで疲れてしまった私は、旅の道ずれであるネスウとネスティに後どれくらいで着くのか聞いてみることにした。

「…はあ、君はバカか？ ついさっきも同じようなことを聞いてきただろっ」

いや、確かに聞いたけど…

そこまで言わなくても…

「ま、まあまあ、2人とも落ち着いてください？ ね？」

「アメル、君からも言っていてやってくれないか。いい加減少しは成長したらどうかって」

「え、え、ええとですね…」

苦笑いのアメルと、呆れ顔をしたネスティが急にこちらを振り向く。

な、なに？

「君は何を笑っている？ まったく…」

え、わたし笑ってたの？

いつの間…

顔を触りつつ答えると、

「ふふふ…やっぱりトリスさんはトリスさんですね。どれだけたって

も変わりません」

と、アメルに笑われてしまった。
うう…

現在私達は遺跡調査の一環で聖王国の南に位置する森へ来ている。どうやらこの先のお城のようなお屋敷の近くに新たに遺跡が見つかったらしく、その調査を命じられたのだ。

だが、どれだけ歩いてもお屋敷すら見当たらないのはどういう事だろうか？

もつかなり長い間歩いているにも関わらず、である。

見つからなくてもいい、凶暴なはぐれ召喚獣ばかりが見つかるのも意外と堪えている。

2人も気を使って疲れをあまり見せないが、結構疲れていると思う。

そんな、さつさと着かないかなあ…なんて思っていたときだ、アメルが急に立ち止まって私がぶつかりそうになったのは。

「び、びっくりした…どつかしたのアメル？」

「何か…変です…」

??? 一体何が…

すると突然アメルが天使の翼を広げた。

いつ見ても綺麗だと思う。

知らない人がいたらビックリするかもしれないが、アメルは豊穡の天使アルミネの生まれ変わりであり、軌跡の力を行使することができる。

「やっぱり、私達さつきから同じところをグルグルと回っています」

「アメル、原因は分かるか？」

「…どうやら結果みたいです。術式はサプレスのようですが…そこ

のガラス片が支点だと思われます。壊してください」

アメルが指を指した先には確かにガラス片が転がっている。
私は言われた通り腰に下げていた剣を一思いに叩き付けた。
すると砕けたガラス片から黒い霧のような物が浮かび上がって霧散した。

これって…

「カスラ
源罪…！」

「どつやら近くに悪魔が潜んでいるらしいな…恐らくは目的地の隣の屋敷だろう。急ごう」

「はい！」

「ええ！」

目的地に向けて、いい加減暗くなってきた森を急ぐ…

「以上が儀式の手順ですわ」

「ああ、ありがとう。やってみるよ」

レーンから預かった無色のサモナイト石に魔力を込める。

魔力とかいきなり言われてよく判らなかつたが、やるつもりならそれっぽい何か体が石に流れていくのが分かる。

そう、思えばメルクリウスは俺が契約して呼び出したのだ。

可能性はある。いや、無くてもあるのだ。

呪文が分からない為、こちらは適当だがそれ以外は完璧に終わる。

「我が呼びかけに答え、門より来たれ！　召喚！！」

サモナイト石が光り、異界との門を開く。

思い描くのは光の剣、闇を切り裂く鋭き刃。
さあ来い。

シャインセイバー！

「打ち砕け光将の剣よ!!」

その詠唱と共に光が弾け無数の武器と炊飯器がヤツの上に降り注ぐ。

辺りにはもうもつと土煙が上がり、ヤツの姿は見えないが、確実に当たったはずだ。

は、ははは…どうだこの野郎！

「俺だってやれば…」「う、うわあああああ!!!」「え、この声…ロウオンか!? 何処だ?」

段々声が近づいて…上!?

ち、ちばいーぶつかるー!

「ぶこぶこぶこ!!」

落ちてくるロウオンをギリギリで避ける。

「いやあ、ビックリしたー!」

「お前…逃げたんじゃ…!」

すると不思議な顔をして、一言。

「…? まだ恩が返せてないのに逃げないよ? 当たり前でしょ?」

まるで、何を言っているんだ? とでも言っような発言に俺は困惑してしまっ。

そしてそれと同時に、自分が凄く小さく思えて嫌気が差した。

「ま、まあそれよりあいつは…」

「…ウズ…オ」

おい!?まさかまだ生きてやがるのか!?

「ッ!?主!早く下がっ…ヒヤッ!?

「フざけるナよオオオオオオオ!!!」

吼える悪魔からとてつもない衝撃波が飛んできて、悲鳴と共に壁へと吹き飛ばされる。

壁にぶつかった衝撃で肺の中の空気が無理やり押し出され、意識が飛びそうになった。

「げ、ふっ…かはっ…はあはあ…」

「に、ンゲンの分際デ焦せてんじゃ…ネえエえエえゾっ!?

は、ははは…体中に穴が開いているのにまだ生きてやがる。

何だって言うんだよ、チクシヨウが…

だんだんとこっちに近づいて来る悪魔を、ぼやける目で見つめる。

ああ、怖い。

とんでもなく怖い。

なんでこんな目にはっかり合っただよ。

死を前にして思うのはこんな情けない言葉ばかりで、俺の心の中にはただ、死にたくないという1つしか残っていなかった。

「ちっちとくたばれっ!!」

振り下ろされた凶手は俺の胸を貫通して、その命を散らした。

はずだった。

「何ダとツ!?!」

目の前にはメルクリウスが渡してくれた刀が俺を守るようにして浮いていた。

《死の危機に瀕し、汝は何を望む？ 汝が最も強き願いを、我に望め》

そんな声が頭の中に響く。

「俺の…望み…。俺の、望みは…」

「いっけえ！ ガイエン!!」

聞こえたのは女性の声だった。

しかしそこに現れたのは鎧を身に纏った鬼。

いろんなことが一度に起こりすぎて、もう何が何だか分からなくなっただ。

朦朧とする意識の中、天使が何かを叫んでいるがもう何も聞こえない。

そんな中、目の前が真っ暗になって…思ったんだ。

力が欲しいって…